

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770194

研究課題名(和文) ナラティブアプローチによる新人日本語教師の主体性に関する基礎研究

研究課題名(英文) New Japanese language Teachers' Subjectivities: Narrative Approach-based Foundational Research

研究代表者

牛窪 隆太 (USHIKUBO, Ryuta)

関西学院大学・日本語教育センター・講師

研究者番号：80646828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：「留学生30万人計画」の達成目標年を2020年にひかえ、国内大学のグローバル化戦略の一環として留学生誘致が盛んになるなど、今後、日本語教育に期待される役割は増大していくことが予想される。その中で日本語教師に求められる主体性とは何か。本研究では、新人日本語教師の経験に注目し、日本語教師が教師になる経験を二つの質的データ分析法を用いて検討し、今後、現場の日本語教師が日本社会において新たな役割を構想するための理論モデルについて検討した。

研究成果の概要(英文)：It can be expected that the role Japanese-language education is expected to play is going to increase even more in the near future. For example, with the Japanese government aiming to have thirty thousand students studying abroad in Japan by 2020, domestic universities are going to be working to attract such students as part of their globalization strategies. What kind of subjectivities do Japanese teachers need to have in this context? This research considers the experience of becoming a new Japanese language teacher, analyzing it using two qualitative methods of data analysis. Usually in discussions of teacher development, the environment in which they find themselves is not considered. Thus, I present a theoretical model for envisioning new roles they can play on the ground in Japanese society in the future.

研究分野：日本語教育学

キーワード：教師研究 質的データ分析法 ナラティブ M-GTA 新人教師

### 1. 研究開始当初の背景

日本語教育学においては、近年、批判的教育学の影響のもと、従来の教育実践を批判的にとらえなおす重要性が主張されるようになった。その流れの中で、現場の日本語教師にも、従来の教授方法を再生産するのではなく、自身の教育ビリーフを意識化し、それを教育実践につなげることで既存の枠組みを超えていくことが求められるようになった。

一方、従来の日本語教育研究において、教師についての研究は進んでいるとはいえ、現場の日本語教師がどのような制約の中で、教育実践と向き合い、どのように主体性を発揮しているのかについてもほとんど明らかになっていないという現状がある。教育現場における主体性の問題が、教育実践がおかれた制度や制約と無関係に考えることはできないことを考えれば、日本語教師の主体性とは、現場の教師が、制約においてどのように既存の枠組みを超えられるのかを検討しなければ議論できないものである。

「留学生 30 万人計画」の達成目標年を 2020 年にひかえ、国内大学のグローバル化戦略の一環として留学生誘致が盛んになるなど、今後日本語教育に期待される役割は、増大していくことが考えられる。では、そのような社会的要請において、日本語教師に求められる主体性とは何か。

本研究では、特に、初任から教授経験 5 年程度までの新人日本語教師に注目し、日本語教師が教師になる経験を二つの質的データ分析法を用いて理解・記述し、日本語教師が教師となる経験の一端を明らかにした。そのうえで、今後、現場の日本語教師が日本社会において新たな役割を構想するための理論モデルについて検討した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は以下のものである。

- (1) 新人日本語教師の教育実践についてフィールド調査、インタビュー調査を実施し、教育ビリーフ、教育実践の関係の実態を教師自身の観点からナラティブ(語り)的に理解し、その経験を明らかにすること
- (2) 時間の経過により、それらにどのような変化が見られ、その要因がなんであるのかを明らかにするために、より広範にわたるインタビュー調査を実施し、新人日本語教師の教育機関への参加について汎用性の高いモデルを構築すること
- (3) 上記(1)と(2)を通して、現職日本語教師を対象とした新たな成長モデルについて考察すること

### 3. 研究の方法

上掲の目的を達成するため、本研究では、以下二つの質的データ分析法を用いた。

- (1) の研究では、近年、言語教育分野でも

実施されるようになった「Narrative Inquiry (ナラティブ探究)」(Clandinin & Connelly, 2000) を援用し、以下の手続きを経てデータ収集と分析を行った。

調査協力者の日本語授業(2 時間から 3 時間程度)への参与観察を実施する。授業はビデオに録画し、教室における教師の言語行為についてデータを収集する。授業後に、フォローアップインタビューを実施し、授業内における言語行為について教師側の意図を聞きとる。採取したデータから、教師自身の教育ビリーフと教室における言語行為の関係について、「中間テキスト」(授業内での言語行為と教師の語り、解釈を織り交ぜたもの)を協力者のやりとりを行いながら作成する。一年の期間において、再度「中間テキスト」を読んでもらい、現在の時点から、自身の気づきや変化についてインタビュー調査を行う。最終的には、上記の作業で得られたデータすべてについて、協力者のやりとりを行いながら「研究テキスト」として確定させる。

記述の際には、研究者となる筆者自身の観点の移行や解釈の根拠をできるかぎり書き込み、一面的な解釈を行わないよう配慮した。

上記の方法論による調査について、当初は、10 名程度の協力者を計画していた。しかし、調査を進めるにつれ、部外者が教育機関の授業に入るという研究デザインが、教育機関によっては実現困難であることが明らかになってきた。そこで、サンプルサイズを 5 名程度に縮小し、調査を実施した。教育機関によっては、授業の参与観察が教育機関の評判にかかわるとされることもあり、調査の途中で協力を断られる場合も多かった。また、協力者が、教育機関を移動することによって、調査の継続が困難になることもあった。最終的には、2 年間の調査期間において継続的にやりとりが可能であった 3 名の新人教師についてデータをまとめた。

(2) では、多くの新人教師が、非常勤講師として教育機関に参加する過程において、求められる教師としてのあり方の中で日本語教育を理解するようになるという、(1) の調査の結果、見えてきた仮説をもとに、21 名の新人教師の教育機関への参加を明らかにすることを目的としてインタビューデータを収集した。新人教師に対して、2 時間程度の半構造化インタビューを実施し、日本語教師になろうと思ったきっかけから今までについて、教育機関での経験を軸に話してもらった。そのうえで、特に教育機関への参加に葛藤を感じている新人教師 12 名を対象として、M-GTA (修正版グラウンデッドセオリアプローチ) を用いて、インタビューデータから概念を立て、そのプロセスを検討した。分析焦点者を「授業に問題を感じている非常勤の新人日本語教師」とし、分析テーマを「新人教師たちが他の教師との関係性において授業に葛藤を感じ、克服するプロセス」とし

た。

(3)では、(1)と(2)の研究を踏まえ、現職日本語教師の教師性を明らかにするために、現場の教師を対象とした授業勉強会を所属していた教育機関に立ち上げ、実践研究として運営するとともに、参加した教師に対して、勉強会における現職日本語教師の学びについてフォーカス・グループ・インタビューを実施した。フォーカス・グループ・インタビューとは、司会者を立てディスカッション形式で行われるインタビューのことである。個別にはなく、ディスカッション形式でインタビューを実施することによって、教師たちが勉強会において考えたことやその背景を率直に聞き出すことができると考えた。

#### 4. 研究成果

(1)ナラティブ・アプローチによって、明らかになった3名の協力者の経験を以下に示す。

協力者の新人教師は、現在勤務する教育機関も、機関内での立場も、教育対象とする学生も異なっており、一年の経過を通して見えてきた教師としての変化も多様であった。しかし、それと同時に見えてきたのは、新人教師であっても、求められるあり方とせめぎ合い、それをずらしていくことによって「逸脱する主体性」を発揮していることであった。大田さん(仮名。以下、教師名はすべて仮名)は、ベテラン教師の目をかいくくりながら「即興」を重視した実践をしていた。また、森田さんは、海外の教育機関への移動を経験し、現地で求められる「日本人教師」としてのあり方をずらしながら、自分が現地で日本語教師として存在する意義(必要とされない日本語を教える「日本語教師」ではなく、学ぶことの楽しさを伝える「日本人教師」であること)を考えるようになっていた。また、現在海外の教育機関に所属する川島さんは、教育機関で求められる学生を「言える」ようにすることの意味を、他の日本語教師とのやりとりによってずらそうとしていた。

一方で、日本語教師として求められているあり方からは、共通する問題点も見えてきた。それは、「学生に必要な日本語を教える」という素朴な枠組みにおいて日本語教育に携わっている限り、日本語教師が、自身が日本語を教える理由を考える必要性に迫られないということであり、教授技術を習得した後は、自身の経験の中で日本語教育を考えなければならない状況におかれていることであった。大田さんと森田さんの事例からは、新人教師が教員室で同僚教師と良好な関係性を構築している場合もそうでない場合も、教師たちの間では、お互いに何を考え日本語を教えているのか、何のために日本語を教えているのかについて、考えを共有する機会をもっていない可能性が示された。また、川島さんは、日本語教師としての自身は「からっぽ」

であると話し、教師の仕事をやめる決意をしていた。川島さんは、教育機関において、教師がそれぞれの言語教育観を話し合うことを提案し、失敗したことで孤独になっていた。そして教育機関において「生産」の感覚をもつことができれば、ここにいていいと感じられるのではないかと語っていた。大田さんや川島さんの事例は、新人教師にとって言語教育観を語ることは、ときに既存の教師コミュニティからはみ出してしまうことを示すものである。その中で、新人教師に求められているのは、割り当てをこなす教授技術を身に付けることであった。

(2)分析(1)の結果を踏まえ実施した研究2では、以下のことが明らかになった。新人教師たちは、授業見学を受け、授業改善を求められるというスタイルの研修を受ける一方で、ベテラン教師の授業を見学することはないという教師環境におかれていた。その中で、教師たちは、[ゼロから手探りで](M-GTAによる概念名を示す)[全部自分でやる]ことが求められ、[教科書=指針]とする中で、日本語を教える教授技術を自分の力で身に付けることが求められていた。新人教師たちは、教育機関のベテラン教師の間に[非常勤=フリーランス]という意識が存在すると感じ、ベテラン教師と関係性が築けないことによって、[無難にやらなければならない]と感じるようになっていた。繰り返し授業を担当することにより、[初級は大丈夫]という自信を得る一方で、多くの授業を任されるようになることで、[考える時間がない]まま、ひたすらに授業をこなすことが求められていた。そして、このままでいいのかという思いと[無難にやらなければならない]ことに対する「こういうものだという受け入れ」の間で、葛藤を感じるようになっていたことがわかった。

この葛藤を乗り越える契機となっていたのが、[ギャップ感]であった。新人教師たちは、自身の日本語が話せなくなるという経験によって、不自然なコミュニケーションにギャップを感じるようになり、また、日本語教師として「やりたいこと・できること」の間にギャップを感じるようになっていた。そして[指針再考のきっかけ]を得ることで、[そうじゃなくてもいい]という気づきを得るという道筋が示された。以上の分析結果から、現場の新人日本語教師に求められるあり方の問題点として、個体主義性と同調性、教師間の経験主義的關係、言語教育観の喪失と教授技術の本質化の3点を指摘した。

(3)では、(1)と(2)の研究成果について、現職日本語教師を対象に実施したインタビューデータから、再度検討した。所属教育機関において立ち上げ、実施してきた授業勉強会に参加していた教師を対象として、フォーカス・グループ・インタビューを用いて、インタビュー調査を実施した。インタビューにおいて教師たちは、勉強会は「あなた

はだあれ」と問われる場所であったと語っていた。

教師たちのおかれた教師環境に注目してインタビューデータを分析した結果、教師たちにとって授業勉強会は、「教員室ではできない話し合い」をするための場となっており、教師たちは他の教師とつながることに意味を見出す一方で、自身の「日本語教師としてのあり方」を問い直していたことが示唆された。さらに、勉強会の話し合いについて、2学期冒頭の活動の方針を検討した結果、教師たちは、教育機関で求められる読解授業のあり方を認識しつつも、それをすべて受け入れるのではなく、自分たち自身の価値観（言語観）からとらえなおす試みを行っていたことが示された。勉強会に出席していたのは、日本語教育分野で修士号をもつ、中堅の日本語教師であった。つまり、教師たちがおかれた個体主義的・同調主義的・技術主義的な教師環境は、分析(1)(2)で明らかとなった新人教師をめぐる教師環境と、ほとんど変わらないものであった。このことからすれば、新人教師は、経験を積んだ中堅教師が、自身の教室の中でのみ成長する姿を見ることによって、日本語教師の仕事をそのようなものと理解し、日本語教育とはそういうものであると理解しているということになる。一方で、従来日本語教育で取り上げられてきた、「教師の自己成長」「自己研修型教師」の議論では、このような現状を乗り越えることができず、むしろ、現状の構造を維持・強化する言説として、作用しているとも考えられた。

以上のことから、今後、日本語教育においては、「教師の自己成長」「自己研修型教師」を超えて、「同僚性」を核とし、求められるあり方から逸脱することで、主体性を発揮するという、新たな教師の成長モデルの形を議論していく必要があると考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

牛窪隆太、日本語教育における「教師の成長」の批判的再検討 「自己成長」論から逸脱の場としての「同僚性」構築へ、査読無、言語文化教育研究、13巻、2016、pp.13-26

牛窪隆太、新人日本語教師の葛藤を生み出すもの 制約の下での発達に焦点をあてて、多摩留学生教育研究論集、査読有、9号、2014、pp.1-10

牛窪隆太、新人日本語教師の教育機関への参加に関する考察 ナラティブ・アプローチによる事例研究、言語文化教育研究、査読有、11号、2013、pp.369-390

〔学会発表〕(計4件)

牛窪隆太他、シンポジウム：教室・学習者・教師を問い直す、2015年3月21日、言語文化教育研究学会第1回年次大会(於東洋

大学・東京都文京区))

牛窪隆太、「あなたはだあれ」という問いが示唆するもの 授業勉強会実践の分析から、2014年3月15日、言語文化教育研究会・研究集会実践研究の新しい地平(於早稲田大学・東京都新宿区)

牛窪隆太、新人日本語教師の発達における構造的問題点を探る、2013年10月12日・13日、日本語教育学会秋季大会(於関西外国語大学・大阪府枚方市)

牛窪隆太、新人日本語教師はどのように教師になるのか 職業参加過程にある教師へのインタビュー調査から、2013年3月16日、タイ国日本語教師研究会第25回年次セミナー(於 国際交流基金バンコク日本文化センター・タイ王国バンコク)

〔図書〕(計2件)

牛窪隆太他、くろしお出版、市民性形成とことばの教育、2016、250(pp.51-83)

牛窪隆太他、凡人社、日本語教育学のデザイン その地と図を描く、2015、248(pp.145-169)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

牛窪 隆太 (USHIKUBO, Ryuta)

関西学院大学・日本語教育センター・講師  
研究者番号：80646828